

経過観察中に冠動脈障害部位に新たに動脈瘤様 拡張をきたした川崎病既往2症例

(個別研究：川崎病に関する研究)

馬場 清, 豊原啓子, 脇 研自, 水戸守寿洋,

*田中睦男

要約：1979年5月より1986年12月までに、川崎病既往児213例に冠動脈造影検査を施行し、87例に造影上冠動脈障害を認めた。そのうち54例に2回以上の冠動脈造影検査を施行し、5年以上の経過観察を行ってきたが、冠動脈障害部位に新たな動脈瘤様拡張が出現した2症例を経験した。川崎病の後遺症としての心血管病変の長期予後を考慮する上で問題となる所見と考えられたので報告した。

見出し語：川崎病 冠動脈障害 冠動脈瘤 冠動脈造影検査

〔緒言〕

川崎病の後遺症としての心血管病変については多数の報告がみられるが、その長期予後については、なお種々の問題点が残されていると考えられる。当科では、1979年5月より、川崎病既往児の冠動脈造影検査を施行してきたが、その後の経過を検討するために、1986年12月までに冠動脈造影検査を施行し、5年以上経過観察が行なわれている症例について分析を行ってきた。この期間に冠動脈造影検査を施行した213例中87例に、造影上冠動脈障害が認められた。このうち54例に2回以上の冠動脈造影検査が施行されたが、2症例に冠動脈障害部位に新たな動脈瘤様拡張が出現した。

この2症例の経過について報告する。

〔症例〕

症例1：生後5ヵ月の時に川崎病に罹患した男児である。川崎病の診断の手引きの主要症状6項目を満たし、二峰性発熱をみた。急性期には、抗生剤、アスピリン、ステロイド剤が投与されていた。発症後2年3ヵ月（年令2才8ヵ月）の時に、当科で第1回目の冠動脈造影検査を施行した（図1の上段）。左前下行枝のsegment 6に石灰化を伴った冠動脈瘤が認められた。発症後4年11ヵ月（年令5才4ヵ月）の時に第2回目の冠動脈造影検査を施行した（図1の中段）。この時はsegment 6の動脈瘤の出口の狭窄が相対的に進行し、右冠

倉敷中央病院 心臓病センター小児科；Div.of Pediatr.,Heart Institute, Kurashiki Central Hospital

*同 小児科

第4回目の冠動脈造影検査を施行したが、ほぼ前回と同様の所見であった(図3の下段)。断層心エコー図では、その後2年間で大きな変化は認められないようである(図4の上段:第4回目の冠動脈造影検査と同時期の所見、中段:その1年後の所見、下段:さらにその1年後の所見)。この症例は、狭心様症状を訴えたことはないが、抗血栓療法とともに冠拡張剤の投与を行っている。

[考察]

川崎病の心血管病変の経過としては、退縮、狭窄あるいは閉塞、再疎通などがよく知られた所見

であるが、この2症例のような新たな動脈瘤様拡張の出現についての報告は少ない。現在のところ、この動脈瘤の出現が、どのような病理組織学的な変化の結果であるのか不明である。冠動脈壁の脆弱性、血栓の溶解、あるいは狭窄後拡張などが考えられるが、症例の積み重ねと更なる経過観察が必要であろう。いずれにしても、川崎病の後遺症としての心血管病変の長期予後を考える上で重要な所見の一つと考えられる。

[文献]

篠原ら:小児科診療、49:1563,1986

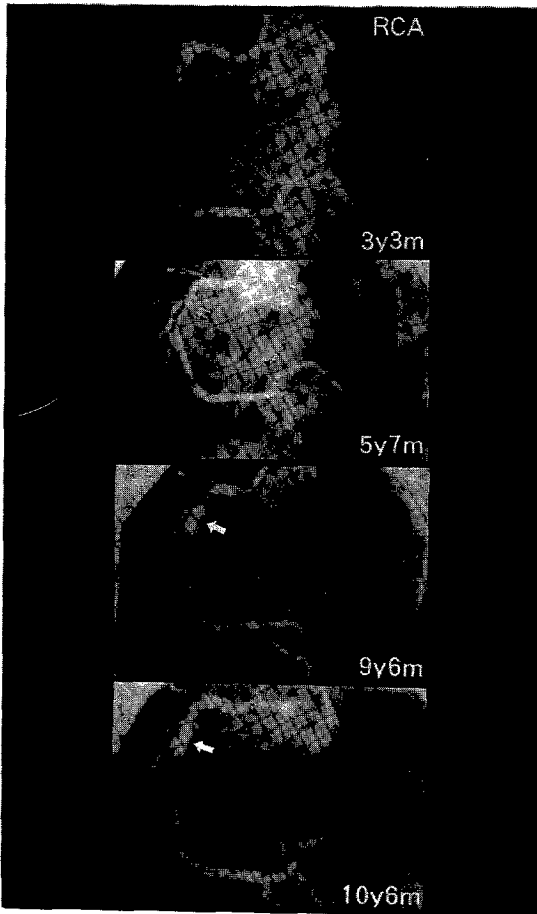


図 3

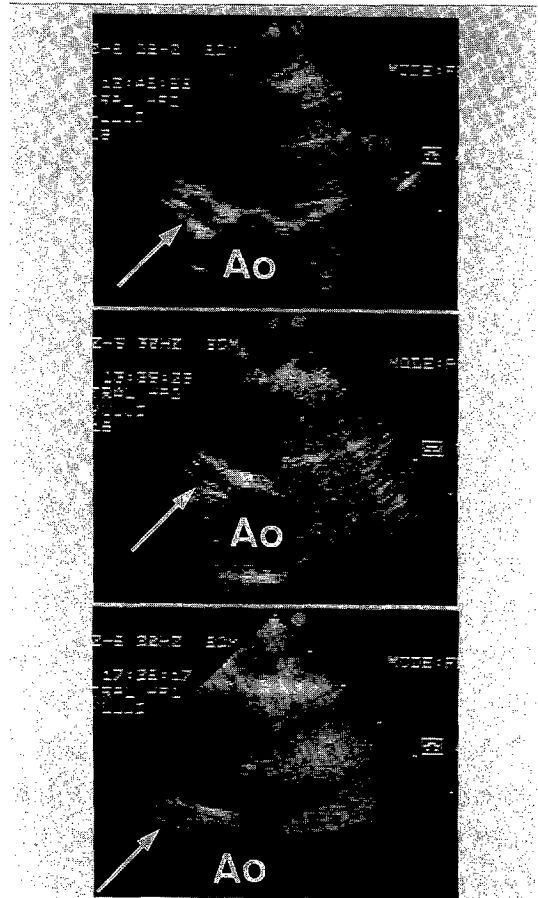


図 4

動脈から左前下行枝への副血行路が認められた。発症後11年目（年令11才5ヵ月）の時に第3回目の冠動脈造影検査を施行した（図1の下段）。図中の矢印で示す如く、今まで存在した冠動脈瘤の末梢部に新たに動脈瘤様拡張が出現した。この新たな瘤は、断層心エコー図では拡張の傾向にあるものと考えられる（図2の上段：3回目の冠動脈造影検査を施行した時期の所見、図2の下段：その2年後の所見）。この症例は、抗血栓療法を継続して経過を観察している。

症例2：生後1才10ヵ月の時に川崎病に罹患した

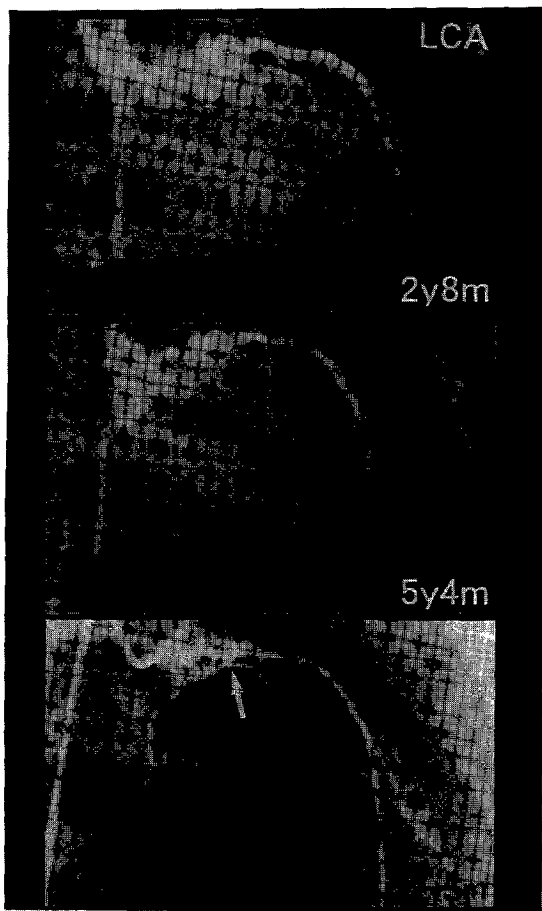


図 1

男児である。主要症状の6項目を満たし、発熱期間は14日間であった。発症後9日目に、断層心エコー図で両側の冠動脈瘤が同定されている。発症後1年5ヵ月（年齢3才3ヵ月）の時に第1回目の冠動脈造影検査を施行した（図3の上段）。右冠動脈のsegment 1から2にかけて動脈瘤が存在し、その末梢部に高度の狭窄（再疎通）が認められた。発症後3年9ヵ月（年令5才7ヵ月）の時に第2回目の冠動脈造影検査を施行した（図3の中上段）。segment 1から2にかけての動脈瘤は退縮してきているが、その末梢部に小さい動脈瘤様拡張が出現した。発症後7年8ヵ月（年令9才6ヵ月）の時に第3回目の冠動脈造影検査を施行した（図3の中下段）。図中の白矢印の部位は、明らかな動脈瘤様拡張となった。さらに1年後に

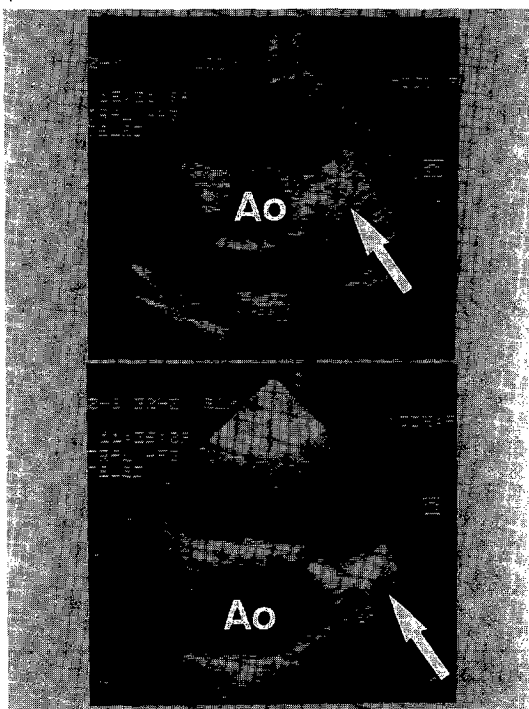


図 2



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1979年5月より1986年12月までに、川崎病既往児213例に冠動脈造影検査を施行し、87例に造影上冠動脈障害を認めた。そのうち54例に2回以上の冠動脈造影検査を施行し、5年以上の経過観察を行ってきたが、冠動脈障害部位に新たな動脈瘤様拡張が出現した2症例を経験した。川崎病の後遺症としての心血管病変の長期予後を考慮する上で問題となる所見と考えられたので報告した。